

決 議 案 第 1 号
令和 7 年 6 月 2 0 日

長岡京市議会議長

白 石 多津子 様

発議者 中 村 歩
 富 田 達 也
 小 原 明 大
 住 田 初 恵
 二階堂 恵 子
 広 垣 栄 治

決議の提出について

沖縄戦の歴史に真摯に向き合い続ける決議（案）を別紙のとおり提案します。

沖縄戦の歴史に真摯に向き合い続ける決議（案）

本年は戦後80周年であり、沖縄戦終結80周年である。戦争を直接体験された人は少数となり、痛苦の体験を語り継ぐことが大きな課題となっている。

沖縄県平和祈念資料館リーフレットは、こう書いている。「米軍は物量作戦によって空襲や艦砲射撃を無差別に加え、おびたしい数の砲弾を打ち込んだ。この『鉄の暴風』はおよそ3ヶ月に及び、沖縄の風景を一変させ、軍民20数万の死者を出す凄まじさであった。日本守備軍は首里決戦を避けて南部へ撤退し、出血持久作戦をとった。その後、米軍の強力な掃討戦により追いつめられ、軍民入り乱れた悲惨な戦場と化した。壕の中では、日本兵による住民虐殺や、強制による集団死、餓死があり、外では米軍による砲爆撃、火炎放射器などによる殺戮があつてまさに阿鼻叫喚の地獄絵の世界であった」。県民の4人に1人の貴い命が奪われた沖縄戦が、凄惨極まりないものであったことがわかる。

「平和の礎」には、沖縄戦で亡くなられた24万人余の氏名が刻銘され、うち2千5百人余が京都府出身者である。激戦地であった嘉数の丘に建立された「京都の塔」は、亡くなられた京都の将兵とともに、「多くの沖縄住民も運命を共にされたことは誠に哀惜に絶へない」と、沖縄の住民にも思いを寄せ、「再び戦争の悲しみが繰り返されることのないようまた併せて沖縄と京都とを結ぶ文化と友好の絆がますますかためられるようこの塔に切なる願いをよせるものである」と結んでいる。同じ敷地に、戦火に倒れられた嘉数地区の住民343名を慰霊する「嘉数の塔」も建立された。我々は、京都の先人たちがしてきたように、沖縄の人々の筆舌に尽くしがたい辛苦に思いを寄せ、その証言や記録を真摯に受け止め、後世に語り継いでゆかねばならない。

西ドイツのヴァイツゼッカー大統領は、ドイツ敗戦40周年の演説で、「過去に目を閉ざす者は、現在にも盲目になる。非人間的な行為を心に刻もうとしない者は、またそうした危険に陥りやすい」と訴えた。さらに40年が経過した今、戦争の記憶が薄らぐとともに、史実を否定や軽視する流れも生まれていることに細心の注意を払わなければならない。

長岡京市議会は令和3年にも、「沖縄戦戦没者の遺骨をはじめ、遺骨が混入した土砂を国内の埋立てに使用しないことを求める意見書」を全会一致で可決している。今、80年目の沖縄「慰霊の日」を目前にして、沖縄戦の歴史に真摯に向き合い続け、京都と沖縄の絆を一層深め、戦争のない世界の実現に尽力することを改めて誓う。

以上決議する。

令和 7 年 6 月 2 0 日

京都府長岡京市議会